『指導者資料』1965年（ＪＳＴ）

教育における自己啓発の意義

日本生産性本部教育研究所所長
矢　口　　新

現代の教育観の問題点

教育とは本来自己啓発が本質である。しかしこのことには説明が必要である。われわれ日本人のもっている教育観はそれとは極めて縁が遠いから、なかなか理解できないであろう。

われわれが教育という言葉を使う時、頭に思い浮べるのは恐らく、学校の教室で教師が学級の生徒に対して教育をしている姿であろう。これは恐らく殆んどすべての人が思い浮べる姿であろうが、子供の頃から何十年という教育を受けた共通の姿であると思われる。その形が教育だと思われている。それが日本人の教育観をつくっている。企業の中で教育をする時もそういう形がとられる。大部分の教育はそういう形で行なわれる。

教育とはそういう形のものを言うのであろうか。この形が教育なのではあるまい。教育を教育たらしめるものは何であろうか。それは被教育者が成長するということであろう。成長という言葉は自然的成長を意味する時もあるから、教育学では、学習という言葉を使う。この学習という言葉は、常識で言う学習とはちがうのである。常識で学習という時は、勉強という程の意である。教育学の術語として使うときは、“経験による行動の変容”という意味に使う。つまり勉強した結果、そこに進歩があった時、成長があった時、学習が成立したというのである。行動というのは、この場合、広い意味で、頭脳の働きもまた行動である。考えるというのも行動で、いわば大脳の行動なのである。身体的な行動ももとより大脳の行動である。それが表にあらわれるか、内面的にかくれているかのちがいであるが、共に大脳の行動にちがいない。

教育を受ける者に何等かの行動の変化があった時、教育が行なわれたのだというのは極めてきびしい立場であるが、ものの本質はそう考えるべきであろう。教室で教育をしていると教師が思っていても、それが生徒に何等かの行動の変容をもたらさなければ、それは教育をしたことにはならないと言うべきである。この辺の考え方が甘いと、やっていることの意味がなくなってしまう。

事実学校の教室で、多くの生徒が授業を受けているがその結果、学習が成立している生徒は何%も居ないという授業があるのである。そういう無駄をしているのも、われわれはとかく教育が行なわれているなどと見ているが、それは極めて甘いと言わなくてはならぬ。そういうのを学習しているなどという言葉でよぶのは本当は正しくないのである。

小学校の普通の授業で、教師の活動に同調して、学習を成立させている生徒は、２０％位と見られるのであって、あとの８０％は多かれ少かれロスがある。そしてまた２０％位は、殆んど何も学習していない生徒がいると見て差し支えないのである。

学習の成立ということが、教育を教育たらしめる本質であるとすれば、その学習を成立せしめる条件は何であろうか。

現在の教育では、教師が生徒に話をして聞かせて、生徒がわかったといえばそこに学習が成立したと考えるのが一般である。これは何も話をするに限ったことはない。本を読んでも、映画をみてもわかったと生徒の側が思えばよいということであるが、その典型的、中心的なものが話をするということである。しかしわ

かるというのは、具体的にはどういうことであろうか。教育の場では 、“わかったか、おぼえておけ”という言葉ほどよく使われる言葉はないのであるが、しかもこのわかるという言葉ほどよくわからない言葉はないのである。わかったと思うのは、生徒の主観であって、それぞれの生徒は、自分なりの程度でわかったと思っているにすぎないのである。わかったと生徒が言うからそれで教師が安心していたら間違いのもとである。その証拠に教師が話をしてわかったと生徒が言った場合、それでは、教師のように今度は生徒が自分で話ができるかというとそういうことはまずない。とても一度や二度同じ話を聞いたからといって、教師と同じようにそのことについて話をすることはできないのである。それは当然といえば当然であることは、われわれは経験的に知っている。しかし教師が手助けをしてやればどうやら、ぽつりぽつりと話せるというようなことはあることもまた経験的に知っている。それはそこに多少の行動の変容があったというように考えてよいであろう。しかしそこで教育をおしまいにして、“わかったらおぼえておけ”といって放り出してしまうのが普通の教育のあり方であるが、それでは多くの場合忘れてしまうことが多いのである。おぼえておけといっても、おぼえておくとはどういうことなのか。生徒の方もハイというが、それでおぼえられるのならいとやすいことだが、なかなかそうは行かない。結局そのままにしてしまえば忘れてしまうのであろう。つまりなかなか定着しないのである。

若し生徒が本当におぼえておこうとすれば家に帰って、一生懸命くりかえして考えて見るということもやらなくてはならない。つまり復習をするということである。そのくりかえしの訓練によって、定着するのである。つまり生徒が自分で考えてみるという行動、やってみるという行動をしなければ、定着はしない。そうして定着した時、われわれのこれまでの常識では本当にわかったなどという。わかるというのは、この場合は、自分で先生と同じように考えることができ、話をすることができるようになったことを言うのである。

こう考えると、一度話を聞いてわかったと思うなどというのはあやしいものである。しかし日本の教育はそういうことが多いのである。教師は生徒になんとかわからせたいと思ってやっているが、それは上手に話をすることだと思われている。しかしその一回限りの話でわからせることができると思っているのだとしたら誠に甘い話である。そんなことでは生徒の行動を変容させることはできない。生徒に自分で考えることができるようにしてやることはできない。

だからそういう意味で多くの教育と思ってやっていることは、本当は教育になっていなくて、時間の浪費になっているのではないかとも言える。つまり授業という時間の間だけ、わかったような気持にさせて、あとは忘れさせるということをやっているのだとも言える。

企業などで教育というものを人を集めて話をすることだと思ってやっているとしたら大いに反省してみる必要があろう。勿論すべてがゼロだということではない。

教育の本質—自己啓発

ラーニング・バイ・ドゥーイングという言葉がある。日本ではなすことによって学ぶと訳されているが、本当は、“なしたことに応じて学習は成立する”と訳すべきである。学習の成立は、勉強している本人がどれだけなしたかによってきまるということである。

ダンスを学ぶ例をとってみよう。ダンスは先生がおどるのを見ていたのではおぼえられない。もっとも先生がおどって見せて、どうだわかったかと言えば、生徒は一応わかったというであろう。わかるという言葉はいろいろな使い方ができる。この場合わかったというのはおどれるという意味ではない。次にそれでは一度まねをして足を動かしてみろといえば、床の足型をふんで一通り動かしてみる。それは一回やった位ではおどれるようになりはしない。しかしそれでもどうだわかったかといえば、やはりわかったと言うであろう。本当はおどれるためには、自分で何回も何回もステッ

プをふんでみなくてはならない。その時は全神経を集中して練習するであろう。そうしてはじめておどれるようになるのである。自分で、おどるということをやらなければ、大脳が足を動かす動かし方を会得しないわけである。

一度ダンスをおぼえてしまうと不思議なことに、次にはどういうステップだなどという神経を使わなくてもひとりでに足は動く。ひとりでに動くばかりではない。神経は全く別なことに集中していても、ダンスはできるのである。パートナーと夢中になって話をしながらたのしくダンスはできる。もうどのように足を運ぶかなどということについての意識はゼロになっているのである。

人間の大脳の働きは不思議といえば不思議である。

これは足を動かすというような身体を動かす行動に例をとったのであるが、足を動かすといっても結局は大脳の働きである。いわゆる考えるということについても全く同様である。或る考えるという過程を人から聞いたらそれは一応はわかるであろう。しかし自分で考えることができるようになるためには、自分で何回もくりかえし考えてみなくてはならない。その練習をつむと、意識ゼロの状態でも、考えることができる。つまり一瞬にその過程がたどれるのである。そういうものの累積によって、むづかしい事もまた考えることができるようになって来る。

例えば数学の文章題を読むとする、読み終った時に答えが出る程度のやさしい問題を考えてみる。その時には文字を使って、またいろいろな言葉を使ってそこに問題が提示されているのを、読む人はスラスラと読んでいる。文字を読んでいるが、それは意識ゼロの状態で一瞬の間に読んでいる。タームが使われて居れば、それも一瞬の間に読んでいる。そういうものの上にその文章によって表現された数学的意味の世界を読みとっているのである。

そういう段階にまで到達するには、そこに文字か語いについてのくりかえしの訓練があったわけである。ダンスと同じように、自分でステップをふんで、くりかえさなくてはならない。

人間の能力が開発されるというのは、結局はラーニンク・バイ・ドゥーイングである。学習するもの、教育されるもの自身が、自ら行動し、行動することによって、大脳自体が行動の方式を身につけるのである。刺戟に対する反応の仕方を会得するのである。大脳細胞の一つ一つは、真空管と全くおなじであるといわれている。多くの真空管の連合が行動となるのであるが、それがドゥーイングによって洗練されるわけである。細胞の連合するスピードが出ると考えてよい。その反応のスピードも恐らく千分の一秒を単位としてはかる程のものであろう。ダンスが意識ゼロでできるようになっていくのもそういう状態なのであろう。

こう考えると、教育の本質は自己教育であり、自己学習である。教育における主役は教育者でなく、教育されるものである。教育されるものが自ら働かなければ、教育されたことにならない。生徒が自ら働くということは、教育されるという意識とはちがう。その逆である。自らが自らを教育する、自ら学習を成立させるということでなくてはならない。従来の教育では、被教育者はいくつになっても、教育されるという受身の立場に立たされている。そういうように扱われるのである。自ら働く立場におかれない。

所で学習はどのような条件の下に成立するであろうか。人間は真空の中では生きることができないように、人間が人間としての存在となるためには、それをつくりあげる媒介物が必要である。人間は社会生活という媒介を通して人間となるのである。つまり生活の環境が人間を人間存在たらしめるのである。生れ落ちてから彼にふれる一切が彼を育てると考えてよい。彼はそれらのものを通じて己れ自身を生活する人間として育って行くのである。

われわれが現在行動する一切は、生れ落ちてから身につけたものである。言葉も、二本の脚で歩くのも、すべて環境の中で自ら行動する（考える）ことを通じて会得して来たものである。それをもっと客観的に言

えば、主体と環境のダイナミックス、環境と主体の刺戟、反応関係において、主体が形成されて行くということである。

これまで教育において、教育する側の働きが注目されていて、被教育者がとかく受身の立場に立たされていた。教育を受けるという語感がそれである。教育する者は己れが働くことを考えるべきてなくして、いかにして、生徒を働かせるかに積極的たるべきである。積極性を発揮する位相がこれまで逆立ちしていたのである。

だから環境に対して生徒が働きかけるようにすることができれば自己学習は成立するのである。教師が或る事柄について解説するのでなく自らが解釈するのである。例えば自然のことについても、社会のことについても、自然はこうだ、社会はこうだと、教師が結論を与えるのでなく、自ら結論を出すように、自分の力で自然や社会を解釈させるのである。その解釈のプロセスを生徒自身にふませるのである。どういうプロセスをたどるかは、適時指示を与えてよいであろう。そういう態度で自然や社会に向うことは、自ら自然や社会に働きかける態度を養うことになる。常にそういう態度で自然に向い社会に向うように生徒を仕向けることが、生徒を自らを高める努力をする人間に育てることになろう。いつも話の結論を聞かされるという状態におかれるのでは、人間は自らを開発する態度をなくすることになろう。学校生活十数年の間そういう状態で暮して来て、更に産業の世界でもまた、人が何かを教えてくれるという状態におかれているのでは、人間は自ら苦難の道をふんで、正しいプロセスをたどって物事の筋道を発見し解釈するということをしなくなる。その結果はそういう能力を開発しないことになる。

わが国の結論をあたえる主義の教育は、手っ取り早いようで大事な積極性を人間の中から奪い去っているといってもよいのである。プロセスこそ大切である。正しい結論を教えるより正しい結論を出す筋道をふむことを体得させなくてはならないのである。自己学習の意義はそこにあるといえよう。

教育の場の構成

教育というのは教育者が自ら働いて人にお説教をすることでない。生徒を如何に活動させるかを積極的に考えて生徒の行動の場をつくることである。教育とは生徒の行動の場を教育的にエンジニアリングすることだといってよい。

ここに一人の人間が居るとする、彼にとっては一応彼の環境としてあるものはすべて彼を育てる媒介物なのである。しかし現実には必ずしもそうでない。というのは彼にとっての環境は彼がそれを認識し得る限りにおいての環境である。環境は彼に対して彼がそれを把握し得る限りにおいてしか己れの姿を表わさない。猫に小判というのはまさにそれである。言いかえれば環境が彼を刺戟し彼に反応を要求するのは、彼が理解しうる限りにおいてのみそうである。彼が興味をもつ限りにおいて環境は彼に働きかけているのである。主体と環境はかくの如くにダイナミックな関係にある。しかし彼が理解し得る限りにおいて、興味関心を示す限りにおいて、すべて環境は彼に対する刺戟として反応を求めている。そして彼の反応が彼を育てるのである。

いわゆる教育の場で、彼に与えられる教科書やその他の教材はその意味で彼にどれ位反応を求めるものとして置かれているのであろうか。多くの場合、それは教師なくしては彼には無縁の存在である。彼に一人では理解できない、興味関心をおこさないものが多い。これまでの教育の場の構造からすればそれでよかった。教師がそれを解説し、仲介者となる役割として存在していたからである。

しかしこれまでの構造では、教師は解説者たるだけがせい一杯であって、生徒に反応を求め、生徒自らその環境を整理し解釈するプロセスの伴侶となることはできない。それぞれがそのような活動をしはじめると、五十人生徒が居れば五十通りのペースで働き出すからである。現在われわれのもっている教師中心の一斉教

育、マス・エデュケーションでは、教師のペースで生徒は動かなくてはならぬ。生徒が教師のペースで動くということは、自ら考えること、行動することを極度に制限されることである。例えば生徒が何かを考える、疑問をもつ、それを解こうとするとしても、教師のペースで話が進められれば、生徒はそれに従わねばならぬ。自分の判断は中止を命ぜられる。ペースの遅い生徒はたえず判断中止をしていなくてはならない。こうして生徒は自ら働くことなく、授業時間を過すことになる。

若し教科書が、生徒のわかるものであり、生徒の答えうる問を出しているものであるとするなら、教科書が生徒に刺戟を与え反応を求めることになる。教科書をこのようなものに作りかえることはむづかしいことではあるまい。今の教科書は、主として結論が出ている。それを導き出すプロセスは背後にかくされている。プロセスをたどることこそ大切だとすれば、その背後にかくれたプロセスをたどらせるような教科書にするべきである。そして結論は生徒が出すことになる。生徒が結論を出すために生徒に与えられるものは、生徒にわかる材料そのものだということになる。それについて、どのような対決の仕方をすればよいか、その方法がはっきり与えられればよいことになる。

これは何も教科書に限ったことはない。いわゆる視聴覚教材といわれるものもみなこのような構造の転換をして提示することができるのである。

われわれはこのような形で生徒に反応を求める材料の提示をすることを電子計算機のプログラミングにたとえることができる。コンピューターに答を求めるには、それに材料を与えて、それを使って答を出す方式を指示してやれば忽ちのうちに答を出して来るのである。ちょうどそのように考えることができる。

人間はそれを二三度くりかえすと、その方式をおぼえこんで、こんどは指示なくとも、自らそれを使って、他のケースや問題をとくことができるようになる。つまり訓練によって、学習し、行動の変容を来たす。コンピューターに与えるプログラムは、非常に細かく分析された作業段階となっている。機械であるから計算のプロセスは一つたりともゆるがせにすることはできない。しかし考えてみると人間の場合も基本的には、必要なプロセスをふまなければならぬことは、コンピューターとかわりない。身体で行うことでも、頭で考えることであっても細かいステップをふんで行うのである。人間の場合はそれが機械のように千篇一律でないだけである。いわゆる機械的でない。訓練によって、いくつかの作業段階を同時に行うようになる。そしてコンピューターとはまたちがった面で物凄いスピードを出して物事を判断し、実際に行う。それが大脳の行動である。

生徒に刺戟を与え反応を求めることを通じて教育するとは、コンピューター的段階から発足して、やがてそれを通りこして、複雑な要素を同時に考えこなして行く頭脳を訓練することだといってよい。それは生徒が自ら活動するということ以外にはない。言いかえれば自己教育なのである。そして教育者は、生徒というコンピューターを如何に働かすかを考える人なのである。教育者は生徒に考える材料を与え、その材料のこなし方に対するヒントを与えて、生徒を活動させる。そして次第にヒントを少くして、生徒が自ら活動するようにする。そういうプロセスをプログラムし、それを実施にうつすエンジニアーが教育者であるといえる。すなわち、教育とは、教育の場、生徒の活動の場を準備して、そこで生徒を働かせるようにコントロールすることである。

自己啓発と教育のエンジニアリング

この二つは一見相反するもののように考えられる。わが国の教育界には自主性、或は自発性などという点について大きな誤解があった。それは抽象的観念的な自発性という考え方であって、場当りの思い付き的行動をさせることが自発性を尊重することだとする考え方がある。しかも一方、一斉教育の方式でいつも受動的な立場に立たされることが多い被教育者たちは、本当に自らの責任をもって考え行動することが少ない。

五十把一からげ的マス・エデュケーションの中で、生徒たちは一般に無責任である。教師の話を聞いても、五十人で聞くということがそういう結果になり勝ちなのである。一人一人が真剣に物に対決して自分の力で考え、行動するという場に追いこまれることが少ないのである。そういう場で場当り的な思い付き的なことを考えさせ、言わせようとする。そこには真の意味の自主性、自発性はない。

われわれのもっている考え方、行動の仕方は、人間が長い歴史の中で育てて来たものがあるのであって、そこに科学や技術や道徳が成立しているのである。そういうものを身につけるにはやはり真剣な努力がいる。聞いてわかるなどというものではなく、自ら苦心して、追体験しなければならぬものである。そういうことのなかから必然的に生み出された自発的な自主的な考え方が大切である。いわば社会のもっている文化の中に入って、それを自己のものとする努力の中で、個性的な思考、行動も生れるのである。教育のエンジニアリングとは、一方で、社会のもっている考え方、行動の仕方に、生徒自らが積極的に参加するような場をつくることをすると同時に、他方で、新しい材料を与えて、自ら対決して、自らの力で考え行動する態度を養成しようとする。そういう場で、自己啓発ということが本当に位置づくといってよいであろう。

自己啓発というのは、生徒の方にそのような意志があるということだけでは成立しないのである。従来はそういう点だけが強調されていて、自己啓発の意志をもてとだけ言われている場合が多い。またそういう地盤で、自由な発言、行動をすれば自己啓発になると考えられている場合も多いが、真の自己啓発は、社会の必然の動きの中で或はさらにいえば歴史的な社会の思考や動きの中へ位置づき、それを自己のものとすることによってはじめて成立つのである。真の自己啓発とは社会と個人の一体化の方向で達成される。

社会の中へ個人が入りこむのは、ただ受動的な教育、教師の話を聞くなどということでなく、自らドゥーイングすることである。ラーニング・ バイ・ドゥーイングということはそういうことである。自ら対象に対決し、考え、行動することによって、社会のものを自己のものとするのである。そこから生れた自主的、自発的なものが尊いのである。自己啓発というのは、そういうものである。それを社会へ投げこむこと、没入することによってそこから生れて来るのである。単なる自己意識のみでは成立しないと言うべきである。そこに教育のきびしさがあるのである。現代の教育は、そのようなきびしさを失っている。

職場教育と自己啓発

日本人は学校卒業後自主的に勉強する者が少ないといわれる。これは確かにアメリカなどの雰意気とちがった所であるが、そこには個人の自己啓発の意識が強いことがありありとうかがわれる。就職後の労働慣習のちがいもあるが、それのみではない。個人個人の能力開発には個人が責任をもつという気風が強いのである。労働慣習もその基礎の上に成り立っていると見る方が妥当である。

わが国の学校教育はそういう勉強についての自己の責任感というものを育てるようになっていない。口でお説教として言うというようなことはあっても、肝心の教育の実態が、上から与えられ、きまった結論的なことを与えられておぼえるというようになっている。例えば自然科学でも自ら発見することでなく、他人の発見した結果を知っているということに関心が行っている。そういった雰囲気が、いつの間にか、自己啓発という概念を失わせる。自ら進んで新しい対象に立ち向い、困難を克服して問題を解決することの中に、自己が啓発され、成長して行くのだという最も基本的な考え方が失われて行っているのである。学校教育の中でつくられる意識の習慣が自己啓発の態度を失わせるのである。

職場の中へ入っても、この習慣はなかなかぬけないでいる。職場のもつ教育の形が第一に日本的である。つまり学校教育的なのである。教育とは誰か有名な人をつれて来て講演を聞くことだと思っているのではな

いかと思わせる職場教育の形態は極めて多い。企業などの教育訓練課の仕事は、そういった講演者をつれて来て、新知識の講義をさせることにあるかの如くである。つまり一種の教育ブローカーなのである。それに応じて、職場の個々人もそれを待っている。そういうものを受けとるのが教育を受けることだと思っている。そういうことが人間の能力の開発にならないことは前に述べた通りである。つまり全体として自己啓発の考え方がないのである。

熱心に勉強をしようという人も、具体的にその勉強の中味はというと、やっぱり人からインフォメーションを得ようということになっていて、自己啓発という考え方が薄いのである。

自己啓発というのは自ら自己の対象に対決して、それを解決して行くプロセスで学習が成立することなのである。そこに主体と環境とのダイナミックスの中で、主体の積極的な態度が生れるのである。人からインフォメーションを受けとるのが学習ではないのである。そういうことも必要ではあるが、基本は自己の周囲に自己が対決して切り開いて行くのが学習であり、自己啓発である。職場における自己啓発は仕事の中で自己学習を成立させることだとも言えるのである。そこにＯ．Ｊ．Ｔ．の本質的な意味がある。

最近東京都の江東区でハエの襲撃になやまされたことがあるが、そこに都の行政が大きな非難を浴びた。この場合行政の任に当る者が、行政の当の対象たる都民の生活の実態から目をはなして、ただ惰性の上に行政事務をとっているという無責任の態度が非難されている。誠に当然なことであるが、このような無気力な態度が生れたのはまさに自己啓発がなかったからであろう。彼等も時には教育を受けるのであろうが、その教育が受身のものであって、人から講演を聞くといった如きことが多かったのではないか。

その辺の事実はともかく、自己啓発の意志が乏しく、自らの環境、自らの仕事に突入してそこで局面を打開して行く所に学習があるという基本的な態度が見失われた結果であることに間違いはない。上司からの強い命令なしには、当然なすべきことがなされないで、ただ机の上の事務を惰性的にやっているにすぎないというのは、本質的に人間としての向上心を欠くものである。自己啓発という基本的な態度を失ったことが、人間能力の低下をもたらしているのである。自己啓発の本質を失った教育はその効果をあらわさないであろう。

能力開発と自己啓発

最近能力開発ということが言われているが、能力の本質は、自己啓発の場を構成することにある。わが国では教育において能力開発という観点が極めて稀薄であって、インフォメーションの注入主義の教育が横行している。これは職場などでは教育の効率を殆んどゼロに等しくしているとも考えられる。

その理由は前に述べた通りであるが、一面から言うと極めて非人間的な教育でもある。インフォメーションを与えて、その結果をテストして、一時を糊塗しているにすぎない。試験の成績が悪かったものは遠慮なく切って捨てる場合もある。またそうでなく、それは表面的な操作で、実体は年功序列である場合もある。どちらにしても真実の人事管理からは程遠いものがある。そういうことが横行したのは、労働力が過剰の時代ではよかったであろうが、これからは許されまい。あと数年で、若年労働力の供給は半減するのである。そういう時には、本質的な能力開発が考えられなければなるまい。その本質的な能力開発は、自己啓発の場をつくることである。

すべての人間が、自己啓発をなしうるように場をつくり、それぞれの個性を発揮するようにすることが能力開発の方向である。すべての個人を十分に生かすことがそのねらいでなくてはならない。

人間の個性的能力は多方向に分化しているのが近代の特色であって、その個性を現代の教育は圧迫している。画一教育による知識注入主義は個性を没却してしまっている。自己啓発の教育で、自己の特性を生かし、自己のペースで行動させ考えさせる教育によって、多

様な個性を生かし、能力を十分に生かすことができるのである。能力開発の真の意義はそこにあるのである。

現在は能力開発という声だけやかましくて、その実質が伴わないのは、教育観の根本が切りかわっていないからである。教育における自己学習の形態を確立しなければ能力開発は不可能であろう。

最後に職場で自己啓発の教育により能力を開発するということになると、これまでの教育システムに根本的なメスを入れなければならないであろう。職場の中の問題が、具体的にとりあげられ、それが教材となって、人々の自己啓発をすすめるのであろう。そのような教材を準備し、提供するのは職場の教育訓練を担当する人の仕事であろう。つまり教育ビジネスの仕事の転換である。これまでは、人を集めて、インフォメーションを与える仕事であったが、むしろ中心の問題は職場の中にある。その中核的問題の周辺にはインフォメーションもあろうが、データーはもっぱら職場の中にあるといってよい。職場に対する各方面からの分析、これが各人の自己啓発に資する教材である。その教材の提示の仕方もまた工夫されなければなるまい。広い意味でプログラム化されていなくてはならない。そういう教育ビジネスが充実しなければ、自己啓発の教育条件が整ったといえないし、能力開発をはかることはできないであろう。新しい創造的な構想は自己啓発に基づく真実の能力開発が行なわれる所に生れるであろう。